

頑張れ・わが故郷・わが母校

東京浦河会 名誉会長 池田 俊一

今年の夏の高校野球で、わが母校、浦河高校が室蘭地区で勝ち上がり南北北海道大会に60年ぶりに出場を決め、故郷・浦河が久しぶりに町を挙げての応援ににぎわった。

この大会は、私の時代（61年前）は全道大会（北海道大会）と呼んでいたと記憶している。

また、この大会には、私の1年後輩が昭和28年に初めて、全道大会へ出場し1回戦で敗退した（60年前）。今現在、このようなことが私の記憶には全く残っていないかったのも事実であった。

ところが、今年の、わが母校「浦河」は、この南北北海道大会で1回戦を札幌北陵に8対4で勝利した。この時の道内の新聞（数紙）が、全校生徒400人と大勢の町民が、バス

7台で応援団を結成し声援を送っていたと報じていた。

この応援の甲斐があり、浦河の町には奇跡が起ったかのような見出しで各紙が紙面を賑わしていた。特に日刊スポーツは、紙面の半分を使い、ハガキ大に「浦河」を見出しにしてその逆転勝利を報じていたのを特筆しておきたい。

その後2回戦も札幌創成に9回に逆転し、6対4で勝利し、初の4強・準決勝進出を果たした。この時も道内日刊紙スポーツ欄は、何故か浦河が紙面を賑わし、浦高の特集かと思われらるくらいであった。

その後、準決勝では、小樽潮陵と逆転に次ぐ逆転を演じ、最終9回の逆転劇も空しく、10対9で惜敗したが、これも今後の道しるべ

であってほしい。

今年の出場選手は、18人の内3年生はわずか3人で、2年生が主体のチームで、良くまとまり大健闘であったと思う（町民の声）。特筆すべきは、報道が持っている力と、その大きな役割である。高校野球の地方大会の報道が、1万4千人余の町に大きな刺激を与え、高校球児の活躍とともに、その報道が町の再生の活力となったことである。（期待を込めて。）

今年の南北北海道代表は東海大四高である。この出場選手の中に、浦河第一中学出身の山口聖人（3年）がおり、甲子園での活躍を期待したいものである。

この紙面の記事は7月17日から24日までの道内の新聞の関連記事の全てを、50年来の友人（同郷の者でない）が毎日、横濱の自宅に送ってくれた紙面の記事を、私なりの主観で記述したものである。

「良き友に感謝」

「東京十勝池田会」の今年の話

東京十勝池田会 会長 清水 洋二

北海道ふるさと会連合会に加入している会員の皆様方に「東京十勝池田会」から今年の話のホットな話題を二つ提供させていただきます。

一番目の話題は、本年2月にロシアのソチで行われた冬季オリンピック大会のスピードスケート（500m）に、池田町出身の2名の選手（長島圭一郎・及川佑両名）が出場して活躍したことです。二人の選手、とりわけ長島選手には、バンクパー大会に続いてのメダルが期待されましたが、残念ながらメダルには手が届きませんでした。4年後の平昌オリンピックにおける更なる活躍を期待しています。

二番目の話題は、「十勝ワイン」の生みの親であり、会の名譽顧問でもあった元池田町長・元参議院議員の丸谷金保氏が94歳で永眠されたことです。去る6月28日に池田町の「田園ホール」で町民及び私たちが関係者約1100人が出席して盛大に町葬が執り行われましたが、会員一同、丸谷氏の遺志を受け継いで、「十勝ワイン」を多くの国民に末永く愛飲していただくよう努力すべく、決意を新たにしているところでありま

す。会員の皆様のご支援をお願い致します。

北加伊道

東京らうす会

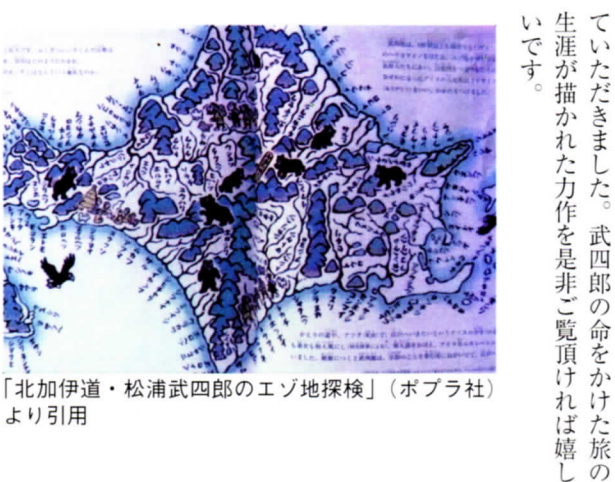
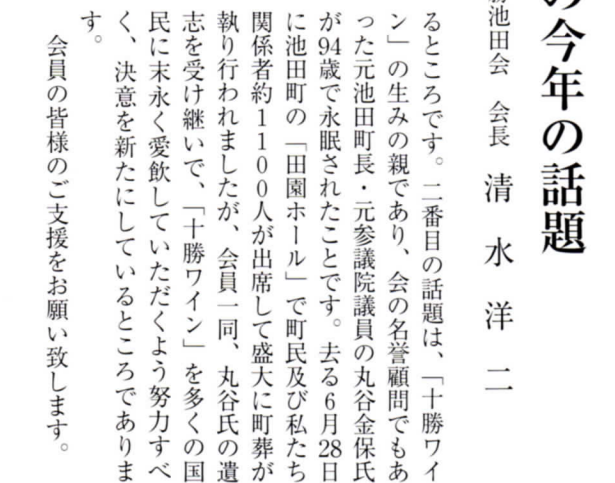
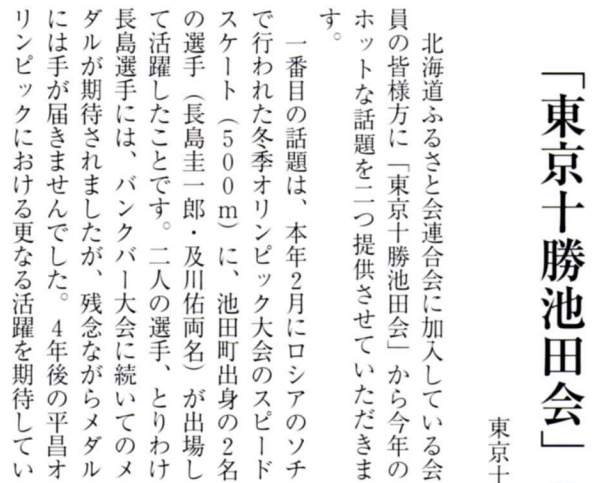
会長 田中 松美

表題のタイトルに？と感じられる方もおられるのではないのでしょうか。これは誤植ではありません。明治2年、北海道開拓のために新設された開拓使の開拓判官に任せられた松浦武四郎（52）が、「蝦夷地」に変わる新しい名前として六つの案を考え、提出した中から「北加伊道」が決まりました。「加伊」とはこの国（大地）に生まれただけでアイヌの人たちのこと。「北のアイヌの国」これをもとに今日の「北海道」の名が生まれました。北海道地図に示るされた多くの地名は松浦武四郎の探検・記録をもとにしたもの。それはアイヌ文化のあかしとも言えます。

以上は東京らうす会顧問の型染版画家・関屋敏隆先生の新刊書「北加伊道・松浦武四郎のエゾ地探検」（ポプラ社）より引用させていただきます。武四郎の命をかけた旅の生涯が描かれた力作を是非ご覧頂ければ幸いです。



1万4千の町民に感動を与えた浦高球児



「北加伊道・松浦武四郎のエゾ地探検」（ポプラ社）より引用